

Field of invaluable learning 2017



CONTENTS

発表団体インタビュー 4

1. 常磐大学TSS支援チーム
2. 関西大学恋する学問
3. 常磐大学TSSボランティアTRICOLOR
4. 追手門学院大学オープンキャンパススタッフ
5. 日本工業大学情報工学科プログラミングSA

教職員インタビュー 14

1. 常磐大学 関 敦央氏
2. 日本工業大学 山地 秀美氏
3. 追手門学院大学 神谷 聡子氏
4. 福岡大学工学部 山口 住夫氏
5. 東邦大学理学部 千葉 康樹氏
6. 中部大学 平岩 和紀氏

当日参加者アンケート報告 20

開催を終えて 22

株式会社ラーニングバリュー代表取締役 安田 仁秀



常磐大学TSS支援チーム

Fil2017 “応援したい団体” 第1位



組織の課題や失敗を「経験」へと変えることができた

失敗や苦労を分かち合ってみたかった

――まずはFil2017を終えて率直な感想をどうぞ！

飯塚 私自身、昨年の雪辱もありまして、「何が何でも今年は1位を目指すぞ！」と1人意気込んでいました(笑)。発表の最中、他のメンバーがかなり緊張しているのが、かなり伝わってきたので、「自分が発表する時は他のメンバーが緊張で伝えきれなかった分、全てを伝えるぞ！」と思って全身全霊で発表しました。1位の表彰を受けたときはとにかく達成感でいっぱいでした。

和田 始まるまでは本当に不安で発表の時も緊張していましたが、終わってみた

らとても充実したと感じました。あの場がとてもきらきらして見えましたし、自分が感じたことを誰かに伝えたい！という気持ちでいっぱいでした。

――2年連続での発表ですが、Fil2017へ戻ってこられた理由は何？

大川 昨年は惜しくも入賞することができなかったのですが、今年は是非とも入賞したい！という気持ちと、昨年とは違った支援チームを見てもらいたいと思ったからです。昨年とは180度組織体制やメンバーが変りましたし、その中で私たちの失敗や苦労を通じて、組織として行動する難しさを分かち合ってみたかったのがあります。

――Filの発表の準備をする中で、改めて

ご自身やご自身の活動について感じたこと、気づきなどはありましたか？

植田 この一年間を振り返ってみると「いっぱいしくじったなあ」とか、「それぞれの活動のリーダーはとても大変だったなあ」とか、「やる気を持って入ってきたはずなのにそのやる気はどこ



にってしまったのだろなあ」とか……（笑）最初は組織内の失敗や課題ばかり目についていましたが、その課題を「経験」と切り替えて、前向きに行動する強さを身につけたのだなと思いました。

——Fil当日みなさんが一番伝えたかったことはどんなことでしたか？

飯塚 諦めないで行動する「熱意」です。私たちはこれまで沢山の「しくじり」をしてきました。しかし、ただしくじっただけではなく、必ずその影には、メンバー一人一人の「熱意」がありました。困難に屈せず、諦めずに行動する「熱意」は誰にも負けないということを何よりも伝えたかったですね。

——それは伝わったと思いますか？

飯塚 伝わったと思います。発表後「熱意に感動した！」「これからも諦めないで頑張ってほしい！」など沢山の激励の言葉をいただきました。きっとFilに参加した皆さんは私たちや私たち以上に、それぞれの活動に対して「想い」や「熱意」が強い方々なのだろうと思います。その皆さんから激励の言葉をいただいたのは、今回私たちが伝えたかった一番の「熱意」が伝わったのであろうと感じております。



Filでは共感し、応援してくれる人たちがいた

——参加者からもらったメッセージカードの内容はどんなものでしたか？

飯塚 活動に対する応援だけでなく、私たちの「熱意」を応援してくださるメッセージを沢山いただきました。学生数たった2000人弱の小さな大学でさえ、なかなか私たちの活動に共感してくれる人が少ない中で、Filでは多くの方々から、叱咤激励のメッセージや共感のメッセージをいただいたことで、何よりも諦めず地道に続けてきたのが決して無駄ではなかったと感じました。今でも何度も読み返しているのですが毎回涙を流しそうになります。それだけではなく私たちは今以上に頑張ろうと組織の結束力にもつながっています。

——活動支援金（応援金）は何に使う予定ですか？

飯塚 具体的にはまだ決まってはいませんが、今後大学をより活性化させるべく、イベントの開催や広報に使っていきたいです。

どの組織の課題も他人事ではなかった

——他大学の発表を聞いて感じたことはどのようなことですか？

植田 どんな団体においても通る道は同じものがあるのだと感じました。報告・連絡・相談の徹底、先輩後輩との関係など、組織の「課題」は決して他人事ではなく自分たちにも当てはまるが多々あったので、こうした課題は組織として活動する中で必ず通らなければならない道なのだと感じました。

——自分の団体以外で一番「すごい！」と感じた団体は？理由も教えてください。

和田 追手門学院大学のオープンキャンパススタッフです！私たちとは違って、メンバーが多くとても大きな団体です。故に、組織として活動するうえでも苦労することも多々あったのにも関わらず、全員が同じ気持ちや想いを共有して、目的に向かって活動している姿はとても感動しました。

——Filに参加して、一番良かった！と思うところを教えてください。

植田 私がリーダーを務めるプロジェクトを応援してくださるコメントを沢山いただけたことです。これまで活動を進めていく中で何度も挫けそうになることがありました。しかし、それでも諦めずに続けてきて、Filの場で発表して多くの方に応援してもらったので今後の自信にもつながりました。

大川 私たちの苦労や失敗に共感してくれた方が多かったというところです。また、ただ共感してくれるだけではなく、様々なアドバイスをいただいたことに喜びを感じました。

——Filへの参加を通じて新たにチャレンジしたいことなどが増えましたか？

和田 私たちはこれまで大学生活を盛り上げることに特化して活動してきましたが、今後は常磐大学に入学してくる



人たちに向けても常磐大学の魅力を感じてもらうために、何かアピールできることがあればそれらにも取り組んでいきたいと思っています。

——団体活動がその他の学生生活や研究活動に役立ったこと広がりを感じたことはありますか？

植田 私は別のサークルの部長を務めています。支援チームに入ってから、今まで曖昧だったサークル内の組織体系をしっかりと整えて一人一人に責任を持たせたところ、サークル内の人間関係が良くなり、サークル活動を円滑にすすめることが出来るようになりました。

自分たちでは見つけられなかったもの

——Filでは参加者がともに学び・学びあうことを大切にしています。グループ内でお感じになった「学び合いの価値」があれば教えてください。

和田 発表内の共通点を他団体のメンバーと意見交換をしたり、他大学の教職員の方々とお話をしたりするなかで、自分の視点や考え方では決して見つけることができなかったものを見つけたことができました。自分たちだけでは決して受けることが、なかった新しい「刺激」を受けることが出来ましたね。

関西大学 恋する学問



Fil2017 “応援したい団体” 第2位

どんな褒め言葉よりも実際に見て、感じてほしい

新たな挑戦への第一歩に

——まずはFil2017を終えて率直な感想をどうぞ！

松田 自分たちが納得できるステージを披露できず、悔しかったです。個人的には、後輩の2人に1位を取らせてあげたかったという気持ちもありました。しかし、今は、5人でゼロから創り上げるという経験ができたことをとても嬉しく思っています。そして、きっと来年は後輩が1位を奪還してくれるのだろうと今からワクワクしています。

——2年連続での発表ですが、Fil2017へ戻ってこられた理由は？

篠原 新しいスタートの日にしたいと

思ったからです。2015年度の受講生から2人、「授業をデザインする側に挑戦したい」という仲間が増え、5人で迎えた「恋する学問2016」。嬉しさを感じる反面、難しさもあり、そこから生まれた葛藤は、昨年のFil2016でお伝えしたことは、またひと味ちがう学びを得るものとなりました。そして、今回は恋する学問の集大成ということもあり、それぞれが次の挑戦に向けて走り出す日にしようという想いで挑みました。

——Fil当日みなさんが一番伝えなかったことはどんなことでしたか？理由も含めて教えてください。

緒方 主人公は学生であること、主人公であるためには変わり続けることが大切

だということです。その手段の一つとして私たちは世界に一つの授業を創りました。一見綺麗に見えることでも、実際は思っているよりも複雑で難しかった部分も多く、そのことも伝えられていたらいいなと思います。

——それは伝わったと思いますか？理由はどうしてですか？

緒方 拙い発表でしたが、色んな形で、色んな受け取り方をしていただけたと思います。そうであつたらいいなあという願いも込めて。

恋する学問に恋した4年間

——Filの発表の準備をする中で、改めて

ご自身やご自身の活動について感じた事、気づきなどはありましたか？

篠原 今回Fil2017の準備に際して、この4年間で改めて振り返ってみると、恋する学問をつくっていく中で、新しい発見や人との出会いがあったり、いくつもの難しい壁にぶつかり試行錯誤したりなど、自分たちの問題意識から始まり、目的達成に向けてアウトプットとインプットを全力で繰り返して進化させてきたなと実感しました。普段まちを歩いている時も、「次はどんな風に受講生の恋心に問いかけていこうかな」とアンテナを張ったり、好奇心から探求して経験を重ねていくなかで、「この気づき、受講生が考えるキッカケになりそう！」と着想を得たり。いつも頭の中には恋する学問のことがありました。

——参加者からももらったメッセージカードの内容はどんなものでしたか？

緒方 私たちの発表を聞くのが二回目という方に、「前回も良かったけど、今回も様々な仕掛けがあって良かった」と書いていただいたことが嬉しかったです。初めての方、二回目の方に対してどのようにアプローチしたらいいのか？と何度も試行錯誤したからです。今回初めての方には「同じ学生でもここまでできるのか、なんだか悔しい！」というお言葉を頂き、お互いに刺激的な時間になったことも分かり、嬉しかったです。



——他大学の発表を聞いて感じたことはどのようなことですか？

河井 他の大学の学生さんも、大学生活に不満を感じていたり物足りなさを感じていたりして、自分から主体的に行動しようとしている人がたくさんいるんだと知りました。ぶつかる壁にも、メンバーの気持ちや組織の形の問題など共通点があるように感じました。また、自分よりも積極的な学生さんがたくさんいたので、自分も負けないようにいろいろなことに挑戦していきたいと思いました。

——自分の団体以外で一番「すごい！」と感じた団体は？理由も教えてください。

山岡 自分の団体以外ですごいと思ったのは、日本工業大学プログラミングSAです。自分たちの団体は専門的な知識とかが必要ではない活動をしているので、



プログラミングという専門性が高く、人に教えるのが難しいであろうものを他者の苦労を減らすために自分も含めブラッシュアップしていくのはすごくエネルギーが必要ですごいことだと感じました。

みんなに負けないようにもっと挑戦していきたい

——Filに参加して、一番良かった！と思うところを教えてください。

河井 大学生活でいろんなことに挑んでいる人たちや、面白い考えをもった人たちと出会えたことです。自分よりも積極的で、いろいろな経験をしている方とお話できたことで、自分ももっと頑張ろうという気持ちになれました。そして、大学生だからといって、できないことはないんじゃないかと大学生の可能性を感じることができました。

——Filへの参加を通じて新たにチャレンジしたいことなどが増えましたか？

篠原 恋心をくすぐる学びの場をまちに広げていこうと思います。（4月から自由大学 <https://freedom-univ.com> で活動中）昨年のFil後は、恋する学問の公式ブログを開設し、受講生の枠を越えて問いかけていくことを意識し始めました。授業が終了した今年は新たな場で冒険をしていきます。6/11にイベントもするので皆さん是非のぞきにきてください！

河井 関西大学Learning Assistantとして、学生の主体的な学びを支援していく活動を正式にスタートさせます。支援するだけでなく、この活動を通して自分自身とも向き合い成長していきたいです。

言葉だけでなく、実際に活動に来て、感じてほしい

——こういった活動を支援したいと思っている教職員やオトナの人にアドバイスやコメントをどうぞ！

松田 1番身近なオトナには学生の可能性を信じて、程よい距離感で見守ってほしいです。信頼できる人が「近すぎず、遠すぎない距離にいる」という安心感は、自分たちを強くしてくれました。また、「支援したい。興味ある。」と思ってくださった方は、話や文字の情報で満足す

るのではなく、実際の活動を見に来てほしいです。どんな褒め言葉よりも、自分たちが創ってきた空間で、何かを感じてもらえることの方が嬉しいと思います。

——団体活動がその他の学生生活や研究活動で役立ったこと広がりを感じたことはありますか？

山岡 活動を通して身についたものは今までを一変させてくれるものになっています。女子4、男子1で活動しているので今まで謎に思っていた女性特有の考え方があたり、意外と男性と共通している部分であったりを知ることができるので彼女に怒られることも減りました（笑）また、絶賛就職活動中なこともあり、「グループで課題に取り組む姿勢」であったり、「他者に何かを伝え形にするための努力」といったものは、学生の団体での活動も、社会の中で自分の中の時計を動かす時も同じなのかなと感じることができ、仕事をすることに対する大きな壁やギャップを感じにくくなっています。そのおかげで、説明会などでも企業の芯の部分にフォーカスすることができ無駄を感じることは少ないです。これは、相手からしたらイラつくことなのかもしれませんが、疑問に思ったことや、こうしたら良いのではないかなということを思いついたら、目上の人であっても発言できるようにになりました。

初対面の人との出会いで気づいていなかった自分と出会った

——Filでは参加者がともに学び・学びあうことを大切にしています。グループ内でお感じになった「学び合いの価値」があれば教えてください。

河井 年齢、出身地、大学など、さまざまな経験をして来た人とグループになり話すことができたので、自分にはない考え方や、面白いお話を聞くことができました。初対面の人とグループになるからこそ、自分で気づいていなかった自分に気付くことができ、新しいことをたくさん発見できたと思います。

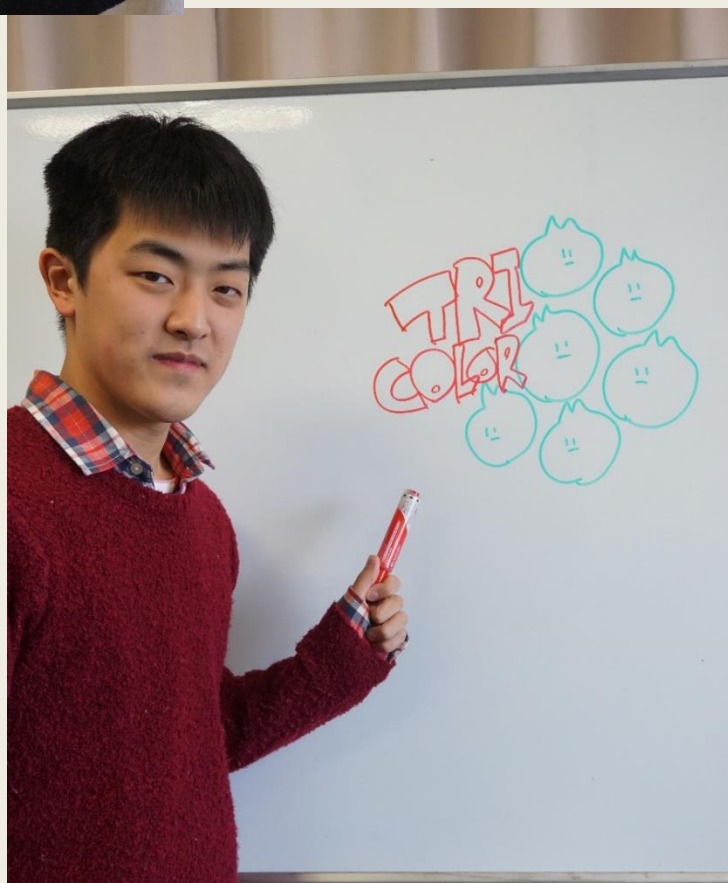
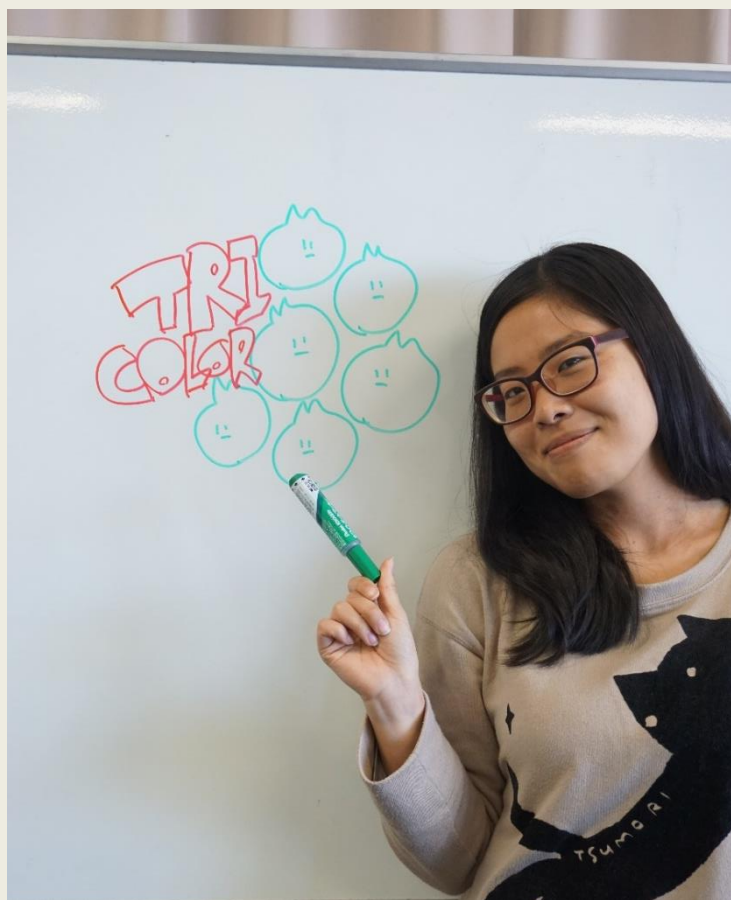
松田 私のいたテーブルは、OBの方が後輩を応援しに来ていたり、発表校ではない学校の学生さんが来ていたり…と多くの立場の方がいらしていました。見守る先輩の気持ちや、「来年は出場するぞ！」という熱い気持ちを持った学生の意見を聞くことができ、非常に刺激をもらいました。駿河台大学の来年の発表に期待大です！

常磐大学

TSSボランティア

TRICOLOR

「2017“応援したい団体”第3位



参加したみなさんと、それぞれの活動の意味を考えたかった

活動報告だけで終わらせたくなかった

——まずはFil2017を終えて率直な感想をどうぞ！

森 Fil2017では私たちの活動を多くの方々にお伝えすることができ、そしてたくさんの方々とお話しをすることができました。普段の生活では成し得ない経験をさせていただき、他大学の学生のみなさま、教職員の方々、そしてラーニングバリューのみなさまに感謝を申し上げます。楽しい時間を、ありがとうございました！

——Fil当日みなさんが一番伝えたかったことはどんなことでしたか？

森 Fil2017で、あのような発表の方法をとったことには理由があります。「考えること、動くことをとめないでほしい。その言動が何を意味しているのか、考え続けてほしい。」自分たちの活動をただ伝えるだけで終わらせるのではなく、そこからみなさん自身のことも絡めて考えていただけたらと思ったからです。考え続けるキッカケに、私たちはなりました。

——それは伝わったと思いますか？

森 伝わった…と信じたいです（笑）みなさんからいただいたメッセージカードには、私たちの活動に対するコメントだけでなく、それぞれ自分たちの活動等と絡めてコメントをくださった方が多くいらっしゃいました。「活動とはなにか？」という問いのコタエを書いてくださった方もいました。メッセージカードを書いてくださったみなさんの「オモイ」が見えたこと、それを理由とさせてください。



改めてこの活動が好き！

——Filの発表の準備をする中で、改めてご自身やご自身の活動について感じたこと、気づきなどはありましたか？

森 「毎日毎日飽きずによくやるよなあ〜」と思いました（笑）発表でもお伝

えしましたが、私の1日のほとんどをTRICOLORの活動が占めています。ですが、それが嫌だとか苦しいだとか感じたことはありません。自分のためにも、メンバーのみんなのためにも、「楽しい」「意味のある」活動でなければ私はここまでやってきていなかったと思います。単純に、この活動が好きなのだ改めて思いました。



——Filに参加して、一番良かった！と思うところを教えてください。

富森 普段だったらなかなか関わることのできない他大学の方々に関わり合えたことが個人的に良かったです。お互いの団体の活動を知り、そこから意見の交換などを行えたことは貴重な経験となりました。Filの場で語り合ったことを、自分の中で活かしていきたいと思います。

——活動支援金（応援金）は何に使う予定ですか？

富森 今後のTRICOLORの活動の中で、必要となる備品などの購入に使いたいと考えています。

みんな懸命に課題を乗り越えようとしていた

——他大学の発表を聞いて感じたことはどのようなことですか？

富森 自分たちの団体だけでなく、他の団体さんも活動をしていく中で様々な問題を抱えていました。「連携がとれないこと」や「意識の差」などのメンバー同士の問題が私の中で特に印象に残りました。私たちの団体だけでなく、他の団体でも同じような壁にぶつかり、懸命に乗り越えようとしている姿を、今回のFilで強く感じました。

——自分の団体以外で一番「すごい！」と感じた団体は？

富森 関西大学の「恋する学問」さんが一番すごい！と感じました。昨年のFilに引き続き発表を聞かせていただいたので、昨年と今年とで比較をしてお話を聞くことが出来ました。今年度になってから、

新しいメンバーが増えたことでそれ故の問題を抱えていましたが、その問題が解決できたのは新しいメンバーも含め、1人1人が積極的に活動を楽しんでいるからではないだろうかと感じました。

——Filへの参加を通じて新たにチャレンジしたいことなどが増えましたか？

富森 私はTRICOLORのプランナーをやっていますが、足を引っ張ってばかりでまだまだ未熟なのでプランナーとして他のメンバー達をサポートできるように動けていません。プランナーの1人として他のメンバー達をサポートし、メンバー全員に活動を楽しんでもらえるようTRICOLORを盛り上げていきたいと思っています。

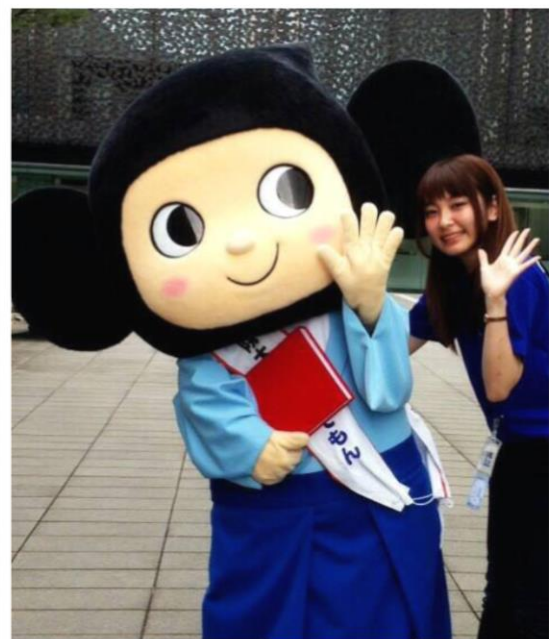
今の自分はみんなのおかげで存在している

——こういった活動を支援したいと思っている教職員やオトナの人にアドバイスやコメントをどうぞ！

森 私のような一学生が大きなことを言える立場にはありませんが、私はただ単純に「やりたいことは素直にやれば良い」のではないかと思います。理由や理屈を考えているうちは「やりたくないこと」なのではないでしょうか。まっすぐに情熱があってキラキラしている人は、こどもでもオトナでもみんな素敵です。

——団体活動がその他の学生生活や研究活動へ役立ったこと広がりを感じたことはありますか？

森 毎日、常に、広がりを感じております！具体的にお話すると長くなりますのでここでは割愛させていただきますが、この活動を行ってきたからこそ今があり、今の自分が存在していると考えています。時折、「この活動を行っていなかったら…」と考えることがあります。この活動を通して知り得たこと、学んだこと、見たこと、感じたこと、知り合った仲間、お世話になっているの方々、それら全てが無かったのではないかと。考えただけで、ゾッとしてしまいます。だから私はいつも、過去の私に感謝しているのです。この「オモイ」を育む場所を見つけてくれて「ありがとう」と伝えたいです。



追手門学院大学 オープンキャンパススタッフ

他者を通じて自分を発見することこそが学び合いの価値

後輩たちに自分たちの想いを残したかった

——まずはFil2017を終えて率直な感想をどうぞ！

大根 代替わりのタイミングでFilに参加できたことで、自分たちが培ってきたものを後輩たちに受け継ぐことができました。その上、改めてオープンキャンパスのあり方や存在意義を考え直すことができたことで、新たな視点に気づき今後の活動方針に繋げることができました。

——Filという場があると知って、発表してみよう！と思われた理由を教えてください。

吉高 まずひとつ目に、後輩たちにこれまでやってきたことやそれに対する思い等を伝えて、受け取ってもらい、「後輩たちらしいオープンキャンパス」というものを創るためのきっかけにしたいという気持ちがありました。二つ目に、私が卒業するという立場になった時に「何か、僕たちが居た足跡をのこして卒業したい」「最後に笑顔で卒業したい」「後輩たちにも同じような気持ちで卒業してほしいから、そのためのきっかけをのこしたい」という気持ちが強くなりました。そんなときにFil2017のお話を頂きました。これらが、Fil2017に参加しようと考えた動機です。



自分たちの当たり前がそうではなかった

——参加者からもらったメッセージカードの内容はどんなものでしたか？

吉高 「グッジョブカード」についてのメッセージが多かったです。私たちは当たり前のよう实施方式してきたことでしたが、実はそうではないということに気付きました。また、「グッジョブカード」は、お互いに認め合う・労い合う・褒め合うことで、個人的な面では『自信・誰かにちゃんと見てもらっているという気持ち・自己理解』に繋がります。またチームとしては、誰かを認めるという行為はその誰かを観ていないとできないの

で、『他者理解・チームとしてポジティブな関係性の構築やストロークのやりとり』に繋がります。これらの点を理解した上で、他の団体の方々にも是非、実施して頂きたいと感じました。

先輩から受け継いだものを後輩に引き継ぐきっかけとなった

——Filに参加して、一番良かった！と思うところを教えてください。

大根 個人的な感想ですが、Filの準備を進める中で、後輩に自分たちが得たことや活動してきたことを明確にしていけることができ、「自分たちが先輩方から受け継いできたオープンキャンパスという場所を託す時が来たんだな」と感じる事ができ、そんな大切な場所に出会えたことに改めて感謝できたことです。

——活動支援金は何に使う予定ですか？

大根 後輩たちの活動を支援するために使用します。新歓等、学生同士の親睦を深められるような活動に充たしたいと考えております。



立場は違っても、対等な関係を共に築いていけたら

——こういった活動を支援したいと思っている教職員やオトナの人にアドバイスやコメントをどうぞ！

全員 応援してくれている人がいるからこそ、私たち学生がやりたいこと、好きなことを出来ているということを改めて感じる事ができました。とても感謝しております。立場は違うけれど、対等な関係をこれからも共に築いていきたいです。

——団体活動がその他の学生生活や研究活動で役立ったこと広がりを感じたことはありますか？

武元 私たちオープンキャンパススタッフは、チームを組んでミッションに取り組むことが多いので、その他のサークルや学生団体でも協調性とリーダーシップを持って活動することが出来ます。また、オープンキャンパス当日の業務において、

初対面の方と話したり、困っていそうな方に声をお掛けする機会が多いことから、日常生活の中でも同じように振る舞えるようになりました。

——Filでは参加者全員がともに学び・学び合うことを大切にしています。グループ内でお感じになった「学び合いの価値」があれば教えてください

武元 他者の価値観・経験・思想を知り、自身の価値観・経験・思想を鑑みる。それがともに学び・学び合うことだと考えます。そして、そこには自ずと「自分らしさ」が浮かび上がってくるでしょう。自分らしさが見つければ、また新たに、他者とともに学び・学びあうことが出来ます。すなわち「自分らしさの発見」につながるものが「学び合いの価値」ではないかと思います。

日本工業大学 情報工学科プログラミングSA



活動するだけでなく、振り返り、発信することが大切

学外の方と関わる新しいチャレンジをしたかった

——まずはFil2017を終えて率直な感想をどうぞ！

山浦 熱かったです。そして、勉強になりました。皆さんの発表を聞いて、その活動に対する想いが非常に熱く感じました。皆さんが行なっている活動の課題を解決するために考え出した様々な取り組みは、私たちが考えもしないことだったので、視野が広がり勉強になりました。

——こういった場があると知ってどうして発表しようと思ったのですか？

渡邊 新しい挑戦をしようと思ったからです。今まで、学校内のボランティア活動や発表会は参加してきました。しかし、学校外の方と関わるのがなかったもので、良いチャンスだと思い参加しようと思いました。



相手をよく知ることの大切さ

——Fil当日みなさんが一番伝えなかったことはどんなことでしたか？理由も含めて教えてください。

山浦 伝えなかったことは“相手をよく知る”です。相手に教えるときや伝えるときは一方的に自分が発信しても、それが相手にとって本当に知りたいことか、欲しい情報かわかりません。相手を知ることで相手の真のニーズを知ることができます。

——それは伝わったと思いますか？理由はどのようにしてですか？

山浦 伝わったと思います。グループ内でもアルバイトやサークルで後輩に教えるときに伝わらなかったことがあり、よく相手を知らないといけないと皆さんおっしゃっていました。

——Filの発表の準備をする中で、改めてご自身やご自身の活動について感じたこと、気づきなどはありましたか？

對馬 振り返る中で、私たちの活動で得たことはSAに限らず、アルバイトやオー

ブンキャンパス等の活動にも関わっていると感じました。

——参加者からもらったメッセージカードの内容はどんなものでしたか？

渡邊 どの団体も相手をよく知ることが大切と感じたと書いてありました。一番伝えたいことが伝わっていてよかったです。

——他大学の発表を聞いて感じたことはどのようなことですか？

渡邊 やはり皆さん、非常に想いがありました。目標も非常に大きくそこに向かって創意工夫をしていました。私たちの活動に取り入れたいことが沢山ありました。

——自分の団体以外で一番「すごい！」と感じた団体は？理由も教えてください。

山浦 TSS支援チームです。ワクワクする学生生活を創る活動の想い、情熱が非常に伝わってきました。TSS支援チームが何かやるのではなく、大学の団体や学生個人と協力しようとしていたので、私たちも誰かと協力して活動を続けたいと思いました。

渡邊 関西大学恋する学問です。私たちと同じ教える立場において、次の世代に任せる勇気を発表していました。これから私たちも次の世代に代わるので勉強になりました。



振り返りをすることで気づけたことがあった

——Filに参加して、一番良かった！と思うところを教えてください。

山浦 振り返りはとても大切だと思います。ただSA活動を行っているだけでは気づけません。各SAの思ったことを共有し、周知できたことで成長でき次につながれると思いました。

——Filへの参加を通じて新たにチャレンジしたいことなどが増えましたか？それはどのようなことですか？

對馬 何にでも機会があれば強い熱意を

もって挑戦したいと思いました。その他には、今行っている活動を振り返り、ほかの人たちに発信をしたいと思います。

——団体活動がその他の学生生活や研究活動（その他のサークル・恋愛やアルバイト、就職に向けての意識・行動など）へ役立ったこと広がりを感じたことはありますか？

對馬 相手を知ることで私はスーパーのアルバイトでお客さんが探し物をしていそうだったら案内をしたり、常連さんのお年寄りの方の荷物を運んであげたり、お客さんが喜びそうなことを自ら進んで行動できました。

自ら発信する大切さ、意見の共有から浮かぶ改善策

——Filでは参加者がともに学び・学びあうことを大切にしています。グループ内でお感じになった「学び合いの価値」があれば教えてください。

山浦 各活動の背景や学んだことを深掘りし、メンバー一人ひとりの大切にしていることを知り、共有できました。また、その活動において改善案が次々と出てきました。

對馬 発表したからこそグループで学び合いができると感じました。自分から発信する大切さがわかりました。



常磐大学 TSS支援チーム/TRICOLOR 心理臨床センター統括 関 敦央氏

学生主体の活動は、学生の学びを確認する機会

――TSS支援チームは2年連続、常磐大学からは2団体の発表ですが、Fil2017に参加してみようと思われた理由は何のようなものですか？

関 学生自身が自分たちの活動の「キセキ」をふり返し、未来に繋いでいこうとすることは、非常に重要なことだと思います。団体内ではPDCAサイクルを活用しながら活動を行っていますが、どうしても内部完結してしまうことが多いのが現状です。ラーニングバリューさんが、Filという”学びの場”を企画していただいているおかげで、自分たちが行っている活動を客観的に振り返るとともに、その内容を他者に伝え、意見をいただける良い機会であると思い参加させていただきました。

――普段、学生を支援されるお立場としてヒントになることはありましたか？

関 学生たちの姿は、自分の鏡なのだと改めて実感しました。まず自分自身が主体的に学び、考え、実践していかなければ、学生たちと一緒に活動する資格はありません。学生たちに背中を語れるようになりたいと思います。

――学生が主体的に学内で活動していくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

関 学びは知識と実践からなるものと考えています。学生たちの主体的な活動は、

大学にとって必要不可欠なものです。

――発表準備をしている学生たちを見ていて感じたことはありますか？

関 自分たちの活動を振り返るということは、良い面と悪い面を合わせて振り返るということです。それは口で言うほど簡単なことではないと思います。学生たちがそこから目を背けず、前に進もうとしている姿に、学生の成長を感じることができました。



来年度に向けて以降の活動に向けて、ご自身として新たにチャレンジしたいと思っていることはありますか？

関 TSSの活動団体は発足後約3年が経ち、紆余曲折しながらも、それぞれの活動の”形”ができてきたように思います。しかし、大学を活性化するためには、TSSの活動団体（学生）はもちろんのこと、他のサークルや学生、教職員等が

連携・協力していかなければなりません。そのためにTSSの学生たちと、「わくわくする学生生活を創る」ための仕組みづくりを考え、実践していきたいと思っています。

――全体を通じてお感じになったこと、Filに今後期待されることなど、メッセージをお願いいたします。

関 学生のみなさんの、情熱あふれる発表を聴くことができ、本当に有意義な時間を過ごすことができました。改めて感謝申し上げます。「大学は誰のために、何のために存在するのか？」大学職員として仕事をするうえで、決して忘れてはいけないことを、Filの中で再認識させていただきました。Filは学生だけではなく、私自身にとっても学びの場であり、これまでの活動を振り返る場でもあります。今後も学生と共に熱く、笑い、悩みながら歩んでいきたいと思っています。



日本工業大学 プログラミングSA 情報工学科教授 山地 秀美氏

問題を見つけ、解決に取り組む学生がロールモデルとなっていく

——Filというイベントがあるとお知りになって、どのように思われましたか？

山地 自分たちの活動以外、他大学でどんな活動や取り組みがあるのかを全く知らない状態だったので、他大学の取り組みを知る事で学生たちの学びを促進できると思いました。大学の垣根を越えて学生たちが交流する場の一つとしても貴重だと思ったからです。

——その上で学生たちと参加してみよう、と思われた理由は？

山地 SA組織がたちあがって4年ほどになりますが、節目で打ち上げをするくらいでしっかり自分たちの活動をふりかえったり、発表したりする事はしていませんでした。学生たちがこれまで取り組んできたことを整理し、振り返る機会にできると考えたからです。

——普段、学生を支援されるお立場としてヒントになることはありましたか？

山地 関西大学の「恋する学問」は、本学でも取り組んでみたいと感じました。3年次から必修PBL授業を実施しているのですが、そこで活躍できる学生を育てる参考になりました。また本学のSA活動が単なる先生のお手伝いではない、SA主体で学ぶプロセスを支援するという事が意外と他大学に見られない取り組みになっていることを確認できたことがよかったです。

——学生が主体的に学内で活動していく

ことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

山地 問題を見出し、その解決のために取り組む学生たちの姿が、他の学生たちが目指すべきロールモデルとなるはずで。その結果として学生の主体的で深い学びを生み出すことになり、年月を重ねることで大学の文化を形成することに繋がると考えます。また、学科レベルではチームで行う課題解決型の授業が多いため、そういう場面で活躍してくれており大きな意味があります。最初は「大丈夫だろうか…」と心配するような学生にも成長が見られるのが嬉しいですね。そのこと自体にも価値があると思います。

——発表準備をしている学生たちを見ていて感じたことはありますか？

山地 こんなに自信を持って話せるようになってきているのだと感じました。繰返し学生たちが集まって議論し、発表準備を進めていました。重要な振り返りの場となったように思います。



——来年度に向けて以降の活動に向けて、ご自身として新たにチャレンジしたいと思っていることはありますか？

山地 現在3年次に地域貢献のテーマを取り入れたPBL実習があります。そこに至るまでの1・2年次の授業をより工夫して、3年次のPBL授業へつながるようにしたいと思っています。現在座学で実施している1年次のプロジェクトマネジメントの授業を体験から座学に入り、2年次ではチームによる開発プロジェクトでプロジェクトマネジメントの実践に取り組む。こうして、3年次までに何度も失敗しながら学べるようにしたい。今年から一部意欲的な下級生も参加させて、異なる学年の学生がチームを組んで課題に取り組みますが、チームビルディングとプロジェクトマネジメントの意識を持たせるように指導していきたいです。

——全体を通じてお感じになったこと、Filに今後期待されることなど、メッセージをお願いいたします。

山地 個人的には、専門教育の学びを促進する事に取り組んでいる団体ともしっかりと出会えるとうれしい。今以上にもしっかりと規模が拡大して、多様な大学・会社・団体に関われるようになるといいですね。



追手門学院大学 オープンキャンパススタッフ 入試部入試課 神谷 聡子氏

学生も教職員も、人と関わり育てる悩みは同じだった

——Filというイベントがあるとお知りになって、どのように思われましたか？

神谷 以前から、他大学の学生同士が交流できる場、学び合える場があるといいなと思っていましたので、とても素敵なイベントだと思いました。

——その上で学生たちと参加してみよう、と思われた理由は？

神谷 これまで、学生たちが個人個人で活動を通じた成長などを整理することはあったものの、チームとしての成長をあらためて言葉にしまとめる、ということではなかったので、今回の発表準備を通じて、自分たちの活動を形にするいい機会になるのではないかと感じました。私個人としては、教職員の方々がどのように学生と関わり、成長をサポートしておられるのかを学びたい、という気持ちもありました。



——普段、学生を支援されるお立場と

してヒントになることはありましたか？

神谷 見守ること、任せること、手を加えること、タイミングやバランスは常々試行錯誤ですが、学生たち自身も人に教えることや後輩に引き継ぐことを通じて、同じような思いを抱いているのだということに気づかされました。学生や教職員という立場を超えて「思い」を共有し、学び合う場はとても刺激的でした。

——発表準備をしている学生たちを見ていて感じたことはありますか？

神谷 予定調和に終わらせることなく、お互いの意見を正面からぶつけ合い、自分たちの力で最終的にひとつにまとめることができたのは、見ていてとても頼もしかったです。正直最後までどうなることかと思っていたのですが（笑）。発表準備を通じて新たな視点を獲得することができたのは、大きな収穫だと思います。また、後日学内で他の学生メンバーに対して報告会を行った際も、彼らの思いに触発されたのか、これまでの活動に対する改善点などをメンバー間で活発に話し合うことができ、良い機会となりました。

——全体を通じてお感じになったこと、Filに今後期待されることなど、メッセージをお願いいたします。

どの団体の発表も学生のみなさんの熱量が伝わってきて、本当に感動しました。また、グループワークでも新鮮な意見をたくさん聞くことができ、学生のみなさ

んから多くを学ばせていただきました。そしてこのような学生たちの成長に立ち会える大学での仕事は、本当に幸せな仕事だな、ということを変えて実感することができました。素晴らしい発表をしてくださった学生のみなさん、教職員の方々、そしてラーニングバリューのみなさん、本当にありがとうございました。





福岡大学 工学部
教授 山口 住夫氏

主体的な活動の中で責任が芽生え、学業にもつながっていく

——Filというイベントがあるとお知りになって、どのように思われましたか？

山口 はじめて知ったときには、従来行われていた「社会人基礎力」のように設定された目的に沿った活動の報告会かと思いました。HPの内容を読んで、それとは少し違うなと思いましたが、それでも活動分野や活動の狙いなどがよく理解できませんでした。

——その上で参加してみよう、と思われた理由は？

山口 ラーニングバリューが関わって企画されたものらしいということから、何かこれまでと違う新しいことを始めたのかな、と興味から参加しました。

——普段、学生を支援されるお立場としてヒントになることはありましたか？

山口 運動部の部長やサークルの顧問をしている関係上、学生だけで企画して行うことにそれほど驚きはありませんでしたが、ここで発表された活動は、サークルとは違って数十人のグループが不特定多数の学生に呼びかけて、これを動かしていくという活動が多く、仲間内の活動とは異なる苦勞を感じました。学祭の実行委員会や新入生支援活動であれば、恒例の大学行事の一環ということもあって、やりやすい一面もあると考えられますが、学生の日常の意識を変えろという自発的におこなう活動は、かなり大変なことだと思います。一方で、そのような活動だからこそ学ぶことも成長することも、他の活動とは違った成果があるように感じました。自主性こそが学生の成長の要因

だとすると、これを指導するのは容易なことではないと感じました。

——学生が主体的に学内で活動していくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

山口 まず、学生が自分を発見することの意味が大きいと思います。すべて受け身の態度から、自分が考え、周りを同調させ、行動し、成果を確認するという一連の活動で、大きな団体の中で、自分自身が如何に動くか、如何にあるべきか、を考えなければ、全体が目的を達せられないことに気づくことを通じて、その責任の自覚こそが成長であり、これが大学での学業にもつながるように思います。

——当日、学生たちの発表を聞いて一番印象に残ったことはどのようなことですか？

山口 全てのグループが、「コミュニケーション」や「意思の伝達」に苦勞していたことです。特に「下級生の教育」に悩んでいたことは、意外でした。上級生との葛藤は当然のことながら、同輩、後輩との関係をうまく作る際の苦勞が意外に大きいようで、このように学生同士のコミュニケーションや、先輩からの後輩に対する影響が希薄なことを意識しないと、大学における「学生指導」がうまくいかないような気がします。

——当日、学生と同じグループでの学びあいの中で、一番印象に残ったことはどのようなことですか？

山口 グループでの討論の際に、Filに参

加している人に対しては、通常は学生には伝わりにくい私自身の経験を話しても素直に理解してもらえないことに少し驚きを感じ、普段自分は何を苦勞しているのだろうという印象を持ちました。もっと学生の理解力を信じて、自分の考えを素直に表現してもいいのかもしれないのかもしれません。

——全体を通じてお感じになったこと、Filに今後期待されることなど、メッセージをお願いいたします。

山口 小さな活動でも、うまくいかなかった活動でも、この会のように苦勞の経験や学んだことを共有する場があれば、当初の活動目的とは違った活動の意味に気づくことができるので、その意義は大きいと思います。たとえば私の大学の学祭実行委員会では、他校の委員会と合同で勉強会などをやっていると聞きましたが、たぶんそこでは、どうやれば行事がうまくいくかという視点が中心だろうと思われます。今回のFilのように活動内容の異なる学内のグループが集まって、活動の中で自分たちが学んだことを認識し、共有できれば、大学内での学生活動の真の意味を知ることができて、充実感もさらに大きくなるのではないかと思います。全国数カ所での様な集まりを開いてもいいのではないかと思います。



東邦大学 理学部
教授 千葉 康樹氏

主体的に活動し、学ぶことは「人として学ぶ」こと

——昨年もご参加いただいておりますが、Filというイベントがあるとお知りになって、どのように思われましたか？

千葉 ラーニングバリューさんらしいイベントだなと思いました。学生主体の活動が増えることが、キャンパスを元気にイキイキとしていくことにつながるというというビジョンを日頃から伺っていました。それが具体的な形になったのが、Filなんだと思いました。

——その上で参加してみよう、と思われた理由は？

千葉 担当の営業マンに勧められたからというのが一番の理由です（笑）ただ、他大学の学生活動の事例を知りたいと思っておりまして、自校でどんなふうに学生活動を組織していったらよいか、ヒントをもらえるのではという期待もありました。

——普段、学生を支援されるお立場としてヒントになることはありましたか？

千葉 大学によって、組織の立ち上げ方がさまざまなのだなと知ることができました。どれくらいの人数で、どんなミッションで始めるのがよいのか、団体は学校公認のほうがよいのかどうか、など。どういう形が自分の大学に合っているのかを考えて動くことが大切だと感じています。

——学生が主体的に学内で活動していくことは、大学にとってどのような意味が

あると思いますか？

千葉 大学は先生から与えられた勉強をするだけの場ではないと思います。学生たちが主体的に活動し、それを通じて学ぶことは「人として学ぶ」ことだと思います。大学がプラットフォームを提供し、それを使って学生が自由に発案する。そこから大学や大学生の可能性が広がっていくのだろうと思います。



——当日、学生たちの発表を聞いて一番印象に残ったことはどのようなことですか？

千葉 今年に限ったことではないですが、あのように大勢の人が見ている中で自分たちの活動について発表することができて、フィードバックまでももらえるというのはなかなかないことだと思います。自分たちの活動の意義を再確認できる場があることは、学生にとって幸せなことだなと感じています。

——当日、学生と同じグループでの学びあいの中で、一番印象に残ったことはどのようなことですか？

千葉 プレゼンした学生さんから、プレゼンでは語っていなかった苦労話や悩み、「実は……だったんです」といった話を聞くことができ、とても深い理解につながりました。そんな話を共有できたことは、発表した方にとってもよかったのではないかと思います。

——全体を通じてお感じになったこと、Filに今後期待されることなど、メッセージをお願いいたします。

千葉 学生にとって、新しいことにチャレンジするには不安が伴うと思います。でも、具体的な行動を起こすこと自体に価値があるし、そのプロセスを通じて、何かを得るのが大切なのだろうと思います。Filの舞台に立つこともひとつのチャレンジでしょう。また、Filに参加することで、チャレンジの価値に気づけることもあるでしょう。そういった意味でFilというイベントそのものが、学生たちの次へのチャレンジのエネルギーになるし、エールになっているのではないかと思います。



中部大学 学生教育部コモンズセンター事務室 平岩 和紀氏

思った以上に自分で考え、楽しみ、悩んでいる

——Filというイベントがあるとお知りになって、どのように思われましたか？

平岩 学内での活動を学外に発信する上で、自分達の活動内容を振り返ることに繋がるのではないかと感じました。私だけではなく、コモンズサポーターのリーダー学生と一緒に参加することで他大学の活動発表から刺激を受けることの出来る良いイベントであると思いました。

——その上で参加してみよう、と思われた理由は？

平岩 私自身は他大学の活動発表から学生支援に関するヒントを得ることが参加の理由です。本学の学生には他大学の発表や同じ立場である学生とのやりとりを通じて、自分たちの活動をより充実させるための発信材料になればと考えて一緒に参加しました。※Fil2016は教職員のみ参加

——普段、学生を支援されるお立場としてヒントになることはありましたか？

平岩 私が思っているよりも学生は「自分たちで考えて、楽しんで、時には悩んで活動に取り組んでいる」ことに改めて気づかされました。職員である自分が良かれと思い指摘することが時に学生の成長の妨げになることもあるということに気がつきました。

——学生が主体的に学内で活動していくことは、大学にとってどのような意味があると思いますか？

平岩 授業(講義)だけではなかなか養うことが難しい「自ら動き出すこと」「主体性」といったことを育むことにつながると思います。授業で得た知識に加えて、課外活動での「褒められたり怒られたりする経験」が、卒業後の社会で活かせる力につながるでしょうし、社会からの本学の評価にもつながるという点で意味があると思います。

——当日、学生たちの発表を聞いて一番印象に残ったことはどのようなことですか？

平岩 どの団体も自信を持って活動を発表してくれていました。自分たちの活動を他者に発信する、周囲の反応を直に聞いてみるというプロセスを通じて、自分達の活動に対する熱意や意欲がより増していったように感じられたところです。



——当日、学生と同じグループでの学びあいの中で、一番印象に残ったことはどのようなことですか？

平岩 初めましての学生同士でも互いに褒めあったりするなど協調性の高い学生が多く見られました。個人的にはもう少しバチバチとやり合うような議論があっても面白かったのではないかと感じました。

——全体を通じてお感じになったこと、Filに今後期待されることなど、メッセージをお願いいたします。

平岩 「学生の成長を願う気持ち」が形になっている、とても意義のあるイベントだと思っています。この機会が今後もより多くの学生達に提供され続けることを願っています。

当日参加者アンケート【報告】

満足度について

	サンプル数	満足した	まあまあ満足した	どちらともいえない	あまり満足しなかった	満足しなかった	無回答
全体	46	32	14	0	0	0	0
		69.6	30.4	0.0	0.0	0.0	0.0
学生	35	26	9	0	0	0	0
		74.3	25.7	0.0	0.0	0.0	0.0
社会人	11	6	5	0	0	0	0
		54.5	45.5	0.0	0.0	0.0	0.0

(上段：人数，下段%)

発表を聞いて、気づいたこと・感じたこと（学生のみ）

団体間の課題の共通性やそれを乗り越えること自体の大切さを感じていただけたようです。他団体との比較の中で自団体へと意識がいつている様子もうかがえます。

- ・ どこも似たような障害に当たるけど、見かた、とらえ方、解決法が違うので新しい発見があった
- ・ 発表していた団体全員が、チームワークを大切に活動していることがよく感じられました
- ・ 大学生だからこそうこういう場で発表できるなと感じました。相手を知って、私(学生)が主人公なんだと思う事が大切なんだと気づきました。
- ・ 私たちの大学にあって、他の大学にはないもの、私たちの大学になく、他の大学にある事に気づけました。オープンキャンパススタッフとしては、とても嬉しい収穫でした。
- ・ それぞれの団体に信念があり、活動報告に限らず苦労した話とそれをどのように乗り越えたのか、というお話があり、とても参考になりました。
- ・ 今日のFilに参加して同じような課題があったり、他の団体ではどのような活動をしているのか共有し合える場であることが感じました。そしてどこの団体にも必ず課題が発生してそれを乗り越えることが大切だと気づいた

グループシェアで気づいたこと・感じたこと（学生のみ）

自分たちだけでなく、他大学の学生と、学生だけでなく、社会人とのやり取りの中で新たな気づきをもていただいたようです。お互いにアドバイスやフィードバックを繰り返す中で＜聴きあうこと＞＜振り返ること＞と言った「自己の探求プログラム」に共通する言葉につながっている様子が感じられます。

- ・ 話をするという事は「聴きあう」という事だと改めて感じました。
- ・ 社会人目線であったり、学生目線であったり、色々な視点で物事を見る事により、いろいろな問題や解決方法が見つかるのだと思いました。
- ・ 今までの4年間でぶつかったことのあるような壁に今ぶつかっている人のお話を聞いたり、自分がまだ全然知らない世界のお話を聞いたり、社会人の方が抱えているモヤモヤを聞けたりして、新しい発見のある時間でした！
- ・ 学生生活で悩んでいる内容が他の大学も悩んでいたことが意外に多くてそれが発表の内容にも繋がっていた。グループで話してみると他にもいろいろな種類の団体があって知ることができた
- ・ それぞれの発表に関連する深い話や、もっとこうしたらよくなるのではないかと、というアドバイスを交換し合えたので、とても有意義な時間を過ごすことができました。
- ・ 発表に関連した話だけではなく、そこから発展した話をする事が出来ました。発表者、見学者、社会人の方々様々な方がいたので、多岐にわたって話す事が出来ました
- ・ 活動を行い、良かった悔しかったで終わらずに、振り返り、次へ、またその振り返りの中で見つけられることもある。そして話し合うことで新たな発見ができました
- ・ 社会の中で闘う人と話せることで逆立場、異立場が分かり、自分の仕方を考えた
- ・ 仲間と共に協力し合う事が結果的に自分の人生に色づける事になるのではないかと感じました。
- ・ 自分たちの団体や大学だけでは見えてこなかった解決策を見つける事が出来ました！

当日参加者アンケート【報告】

ご自身が支援者として大切だと感じたこと（社会人のみ）

- ・ 活動への継続的な動機づけと目的意識(ぶれない軸)
- ・ 学生を信じて見守る距離感。みんな素晴らしい可能性を持っていると感じました。
- ・ 目的の共有・仲間との人間関係をつくるために、思いを伝える、聞く
- ・ 過保護にも放任にもならず寄り添う事

学生が自ら学ぶために支援者として難しいと感じること（社会人のみ）

- ・ 「学び」への継続的な動機づけ
- ・ 学生の好奇心や可能性の大きさに制限を設けずにいかに対応するか。
- ・ 組織の目的(大学としての)を達成する事、学生の思いを尊重する事のバランス、もっと任せてみようと思いました。
- ・ 学生の抱える様々な問題へ対応するために、多岐にわたって学ばなければならない
- ・ 場づくりと介入の仕方
- ・ まかせて見守ること。任せっぱなしにしない
- ・ 支援者がどこまで関わっていいのかが分からない
- ・ 物理的な事、お金の事、これらを言い訳にして何もやらない大人がいる事
- ・ 多様なきっかけを作り、与える環境とチャンスに変える考え方をどう伝えられるのか

学生が動き出すまで、動き出してから、立ち止まってしまったとき…すべてのところで、支援者がどう在るべきか？という問いを持たれた方が多かったようです。

その他、特に印象に残ったこと、気づいたこと

（学生）

- ・ Filの空間は、対話できる空気感があるように感じています。普段自身のプロジェクトに一生懸命な学生ほど改めて自分の活動を客観的にみれなかったり、そういう時間をとっていなかったり（とれなかったり）することがあると思うので、とても意義のある時間だと思います。ありがとうございました！
- ・ 2年続けて見学者として参加させていただきましたが、とてもいい機会になりました！どの団体もすばらしく、失敗や成長、どういった組織運営をしているのかなどといったことを聞けてありがたいと思っています。本日はありがとうございました。
- ・ 他大学の方たちがどういった活動をしているのかを知る機会が今までなく、行動する事が出来ずにいましたが、今日来てすごく楽しくて、すごく良い刺激を受ける事が出来てすごく良かったです。ありがとうございました。
- ・ 今まで本当にありがとうございました。社会人になっても社会人枠で参加出来たらいいなと思います。
- ・ やはり、こういう場でお互いの共有をし合ったり、他大学の人と話すということはとても新鮮であると感じました。とてもいい経験したと思います

（社会人）

- ・ 学生の視点や気づきの深さから、社会人の自分も学ぶ事が多かったです
- ・ 学内の発表では得られない緊張感と刺激を得られる良い場所だと思いました。
- ・ 自分たちの活動に対する熱意を見習いたいと思いました。
- ・ グループで共有する中で、学生さんたちがとても深い気づきを得ていたのが良かったです。私自身もとても勉強になりました。
- ・ 学生も社会も起きる課題は同様であり、学生の方がその課題に真剣に向き合っている
- ・ 学生と社会人が学び合える場に参加出来て嬉しかったです。ありがとうございました。
- ・ 比較する事がどんなに楽しくて、新しい発見なんだと知ってもらえたのではないだろうか(人を比べるのではなく物事です)

『学び』はエンターテインメント

株式会社ラーニングバリュー
代表取締役 安田 仁秀



Fil2017 に参加し、人って凄い！学生って凄い！と素直に実感しました。
また「学び」は人に感動を提供するとも感じました。

「学ぶ」と言うと、辛いもの、苦しいものと想像しがちになるかと思います。
しかし、Filの会場では、感動で溢れかえっていたとお感じになった方も多かったのではないのでしょうか。

学生自身の1年間のさまざまな学びの中で、得たこと学んだこと、感じたこと思ったことなどたくさんの成果の発表がありました。
ただそれ以上に学生のみなさんがそのプロセスにおいて感じ得たく思い＞は確かそこに存在し、その思いが胸に染み込み、その思いが「感動」を提供したのだと思います。

ご存知のようにマズローは「人は自己実現に向けて常に成長するもの」とし自己実現理論を唱えました。Filで発表した学生たちはマズローの言う「自己実現欲求」に達していたのではないかと思います。
そして、それが人の心を動かした。
人が自己実現しようとする姿そのものが、感動を呼び起こすのだと感じました。

自分は感動を提供するような学びをしてきただろうか？と自分に問うと、少なくとも学生時代にはなかったように思います。

弊社は『学びの価値の探求』を企業理念とし、学びの価値について日々考えています。

「学び」は感動を提供する。
「学び」はエンターテインメントである。

そのような新しい価値を学生の皆さんから学びました。
学生の皆さんに感謝します。
そして私自身も、そのような学びをより深めて参りたいと思います。

編集後記

先日、大学に通う父から「仕事を辞めてから何もしていない人と大学に来ている人を比べると、柔軟性や受容する力、好奇心などが全く違う。学び続けることができる人はいくつになっても成長するんだと思う」という話を聞きました。人はみな成長したいという欲求を持っている、と言いますが、その欲求を自ら自覚し、取りに行ける人に、より深い学びと成長があるのではないだろうかと思います。

その意味で、Fil2017にお集まりいただいた発表団体やご参加いただいたみなさまとともに学び、学び合えたことを感謝し、この輪をより大きくしていきたいと改めて感じました。関わってくださったみなさまに感謝いたします。ありがとうございました。（吉田）

今回コメントを頂いた皆さま、お忙しい中快くご対応頂き、本当にありがとうございます。この報告冊子から、改めて大学生活の中で学生が主役になる事（主役であると感じる事）の難しさと、主役になる事（もしくは学生が主役であるという気づきを促進する事にチャレンジする事）で個人・組織としての自信や成長につながるという事も感じました。

Filがこれからも皆さまの学びや新しい出会いの場としてお役に立てるように工夫を重ねていきたいと思います。最後に、Filへご参加頂いたみなさまにも改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。（安達）



発行人
安田 仁秀
編集
吉田 未来子・安達 雄一

発行
株式会社ラーニングバリュー
本社
東京都港区浜松町1-25-13浜松町NHビル4F
お問い合わせ
03-5776-5960

※無断転用・転載は禁止とさせていただきます

『Field of invaluable learning』で大切にしたい事

- ・ 互いの成長を願う姿勢を大切にすること
- ・ 互いに感じた事・考えた事を出来るだけオープンに話すこと
- ・ それぞれの「違い」を楽しむこと
- ・ 学生も社会人も＜学び合う＞こと